

文化論集第32号
2008年3月

消 息

川中子弘先生のご退職にあたって

川中子先生について書くのは面映いことである。先達というほどには歳が離れていないし、同僚と呼ぶには筆者の方が若輩に過ぎる。しかしともかく年齢差を感じさせずにいてくれたため、「川中子先生」と呼ぶことも、ですます体で話すことも絶えてなかった。面映さの大半は、やむをえずまとわねばならない他人行儀に由来する。

先生の持病のことはとうから知っていたが、他人の痛みはわからないもので、かなりの年月を残して早期退職の道を選ばれるなど、どうして予想できただろうか。晴天の霹靂。私は未練たらしく、「65歳までがんばってみたら？」と内心必死で引き止めてはみたのだけれど、決意は固い様子だった。

商学部にて奉職して以来、長年、川中子先生とは研究室を隣り合わせてきた。「出勤（出講）時間帯」を等しくしていたせいもあって、顔を会わせるのが一番多かったのは、抜群に川中子先生である。しかし、この近さは往々にして「悲劇」を呼ぶのであって、いつでも時間があると思えばこそ、あまり酒席を共にすることもせずにはいた。先生が持病のせいで控えていらしたというのが理由の大半だが、他学部のある先生に伺ったところ、「昔は川中子さんとは飲んだ、飲んだ」とのことで、私が奉職の時機を逸しただけのことだったのである。

ただしなんらかの機会にご一緒すると、あの峻厳な(?)表情が一転して和らぎ、大笑しつつ冗談を飛ばしまくる一面も見せてくれた。「酒の飲めない、いい病気にかかったものだよ」というのも川中子先生のせりふであったが、もう少し「無理」をさせておけばと、後悔しきりである。

先生の生誕の地が旧満州チチハルであることも（「ただし45年3月幸いにも帰国」と略歴にはある）、長くお住まいだった横浜の地が私の現住所に近いことも、いつか伺っては、改めて略歴を見る今まで思い出さずにいた。高等学院の出身であることも、現在の学院出身者の姿からすれば似つかわしくなく感じられてしまうのだが… 学院入学か

ら起算すれば、47年の長きに渡る早稲田生活を送られてきたわけだ。仏文科を卒業されたのは1968年のことである。

親子ほども専門を異にする私ほど、ブルースト研究者たる川中子先生の業績を論じるのに不適任な者はいない。留学生時代に買ったブルースト『失われた時』全巻も、かつて買い揃えた翻訳も、研究室に積まれっぱなしである（すみません。老後の楽しみにさせてもらいます）。

しかし、川中子先生と言えば、「文化論集」に発表される、これでもかとばかりに分厚いブルースト論で、年中行事のようにわれわれを驚かせたものである。とりわけ2003年に発表された著書『ブルースト的エクリチュール』（早稲田大学出版）には、お世辞抜きに刮目させられた。「継続は力だよ、きみ」と決して言われはしなかったが、私など同じ学者として、ひどく忸怩たる思いをさせられたものである。

その文体たるや、一頁全体、稀には数頁に渡って改行なし、という力業ぶり。しかもブルーストについて何がしかの知識を持たない読者を寄せ付けない一徹さに貫かれている。素人向けの「概説」など、はなから拒んでしまうのである。

その点で、授業態度の厳しさにかけて「有名人」であった川中子先生に通じるのだろう。ペットボトルの飲料を平気で飲み、だらけた態度を隠そうともしない昨今の（一部の？）学生が、許し難い腑抜けと見えたのだろうか。研究と同様、授業においても妥協と媚びることを知らない一本な方であった。

同じフランス語の教員であられた鈴木豊先生とは、何回かお宅に泊まって長時間話を伺ったことがある。ご退職間際、鈴木先生は例の人懐こい微笑を見せながら、「世の中、経済、経済ばかりで、もう未練はないよ」とおっしゃって私を驚かせた。われわれ凡人には吐けない、まるで「賢者の言葉」のように耳に響いたからである。そんな鈴木先生も私が奉職し立ての頃、「商学部はいいだろ？」と、あたかも自慢するかのように、酒席でにやりと笑いかけてこられた。商学部教員としての生活を最後まで、心底楽しまれていた御様子だった。

川中子先生も、思い出せないくらい昔、商学部はどうですか？との私の問いに、「のんびりしてて、いいですよ」と答えられたのが心に残っている（こういうことは、えて

して本人がお忘れのケースが多いのだが)。

それ以来、日本の社会は、日本の大学は変わってしまったのだろうか。どうも風向きが世知辛い方に向かっているようだと感じるのには、私だけではあるまい。そうした流れに掉さすような風姿の(「そりゃ、買いかぶりだよ」と笑われるだろうが)大学人が、またひとり母校を去ってゆく。

業 績

著 作：『プルースト的エクリチュール』, 2003年3月

論 文：

〈プルースト論〉

- 1) 「プルーストの象徴主義」, 早大大学院文学研究科紀要17号, 1971年12月
- 2) 『『失われた時』における嫉妬の機構』, 日本フランス語フランス文学研究23号, 1973年10月
- 3) 『『反サント=ブーヴ論』その二つの版をめぐる』, 早大大学院フランス文学研究8号, 1974年6月
- 4) “*Contre Sainte-Bauve*” et la réminiscence dans «Venise», Bulletin de la Société, des amis de Marcel Proust, No.28, 1978.
- 5) 「*Contre Sainte-Beuve*の輪郭 — 〈記事〉の三分節体をめぐって」, 日本フランス語フランス文学研究33号, 1978年10月
- 6) Le mécanisme d’une biffure — Le *Contre Sainte-Beuve* en 1912, 人文社会科学研究(早大理工科)21号, 1981年3月
- 7) Note sur les brouillons de l’essai anti-beuvien — Pour une chronologie du *Contre Sainte-Beuve* —, 駒澤大学外国語部論集14号, 1981年9月
- 8) Note sur l’état primitif du *Contre Sainte-Beuve*, Bulletin d’informations proustiennes, No.13, Paris, juillet 1982.
- 9) 「プルーストのサント=ブーヴ批判」, 早稲田商学312号, 1985年7月
- 10) 「男はソドムを, 女はゴモラを」, 早稲田商学318号, 1986年8月
- 11) 「作者による『失われた時を求めて』読解のレッスン若干」, ユリイカ, プルー

スト特集号, 1987年12月

- 12) 「ヴァントウイユの小楽節(1)」, 早稲田商学335号, 1989年7月
- 13) 「ヴァントウイユの小楽節(2)」, 早稲田商学337号, 1990年3月
- 14) 「ヴァントウイユの小楽節(3)」, 早稲田商学341号, 1990年10月
- 15) 「ヴァントウイユの交霊術」, 早稲田商学343号, 1991年2月
- 16) 「眠れる女」, 早稲田商学348号, 1991年9月
- 17) 「晦渋な語り手たち, あるいは暗喩について」, 早稲田商学350号, 1992年3月
- 18) 「レットル・ダムールⅠ」, 文化論集2号, 1993年2月
- 19) 「レットル・ダムールⅡ」, 文化論集3号, 1993年12月
- 20) 「レットル・ダムールⅢ」, 文化論集5号, 1994年9月
- 21) 「サン・マルク寺院の秘儀」, 文化論集13号, 1998年10月
- 22) “La ressemblance entre la petite phrase et *Tristan* de Wagner», Bulletin de la société des amis de M. Proust, No.48, décembre 1998.
- 23) 「真の接吻器官とは?」, ユリイカ, プルースト特集号, 2001年4月

〈フローベール論〉

- 1) 「15,000フランの顛末 — 『感情教育』について— (前)」, 文化論集9号, 1996年9月
- 2) 「15,000フランの顛末 — 『感情教育』について— (後)」, 文化論集18号, 2001年4月

〈物語研究〉, 〈記号学〉

- 1) 「物語としての世界・素描」, 人文社会科学研究(早大理工学部)23号, 1982年3月
- 2) 「〈物語〉というコード」, 記号学研究2号, 1982年4月
- 3) 「『オイディプス王』の神話」, 記号学研究5号, 1985年5月
- 4) 「物語, 強迫神経症?」, 記号学研究6号, 1986年5月
- 5) 「悲劇と喜劇の物語論的一考察」, 記号学研究9号, 1989年5月
- 6) 「女神冥界降り」, 文化論集1号, 1992年9月

- 7) 「牛頭の王」, 文化論集16号, 2000年3月
- 8) 「描線について —〈視〉の記号学的考察」, 文化論集32号, 2008年3月

〈『ハムレット』論〉

- 1) 「誰が真に殺されたのか?」, 文化論集25号, 2004年9月
- 2) 『『ハムレット』論 第一部7章, オフィーリアの死』, 文化論集28号, 2006年3月
- 3) 『『ハムレット』論 第二部, 『ハムレット』と同時代, 8, 9, 10章』, 文化論集30号, 2007年3月
- 4) 「塔への献呈ソネット —思い溢れるわが胸の……」, 文化論集31号, 2007年9月

〈書評〉

- 1) 『記号としての芸術』講座・記号論Ⅲ, 週刊読書人, 1982年秋
- 2) 池上嘉彦著『記号論への招待』, 週刊読書人, 1984年6月4日
- 3) 平井啓之著『テキストと実存』, 記号学研究11号, 1991年5月

〈翻訳〉

- 1) P. ブリュネル他『文芸批評の新展望』(共訳), 白水社, 1985年3月
- 2) デルフォ, ロッシュ『歴史と文芸批評』, 法政大学出版, 1986年3月
- 3) H. ラボリ『虐殺された鳩 —暴力と国家』, 法政大学出版, 1987年12月
- 4) H. ラボリ『コペルニクスは何も変えなかった』, 法政大学出版(共訳), 1994年6月
- 5) Ph. ルジュヌヌ「性とエククリチュール」, ユリイカ, 1987年12月
- 6) S. T. メンツェーラ「プルーストの読者サルトル」, ユリイカ, 『いまサルトル』, 思潮社, 1991年7月

宇田川 博